

100年以上の歴史を紡ぐ 茅葺き屋根のリノベーション

Builder：関工務店 Place：長野市 Family：夫婦

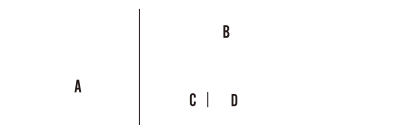
江戸時代から長野市若穂で家族の暮らしを守ってきた、おおらかな茅葺き屋根の住まい。古きを受け継ぎつつ、暮らしやすい空間へとリノベーションを望んだご夫妻が相談したのが、関工務店の2代目を継ぐ関 博之さんです。「古いものと新しいものが調和する空間」を目指して柱や梁を一つひとつ見極め、窓の配置や素材を吟味しながら、新しい歴史を刻む住まいを生み出しました。



江戸時代から住み継がれた住まいを、必要十分な心地良さへ

おおらかに広がるダークグレーの屋根が、モダンな中に風格を宿す住まい。Sさん夫妻が暮らす家の始まりは江戸時代にさかのぼり、100年を超える歴史があります。「昔は商店も兼ねていたから、私が小さい頃は北側は広い土間のお店になっていてね。小上がりで親父さんが接客をしていた風景をよく覚えています」とご主人。

広大な敷地には手入れの行き届いた庭や蔵、そして約153㎡と広い茅葺き屋根



A_かつて米や肥料を扱う店舗併用住宅として、通りに開かれていた住まい。大きな茅葺き屋根の上から新たにガルバリウム鋼板を張り、外壁も同系色の左官材で仕上げて趣を継承。 B_住まい東側の和室は手を加えず残している。引き戸や欄間、襖に往時の職人の手仕事がかがえる。 C_リノベーションした玄関ホールは左官材と引き戸を一新。古い空間になじむ天然素材を選んだ。 D_玄関ホールの天井を抜いて現れた梁と茅葺き天井は見せる設計とし、住まいの顔に。かつてこの場所に囲炉裏があったため、燻された梁が豊かな表情を見せる。



の住まいがあります。長らくご両親が暮らしていましたが、近くで暮らしていたSさん夫妻が10年ほど前に引っ越しを計画。快適性や断熱性を高めるリフォームをしたいと、知人の紹介で関工務店の関博之さんに相談しました。

夫妻の希望は「昔の雰囲気は残したまま暮らしやすさを高めて、次の時代に残るものにしたい」。できるだけ古い物も生かしたいと、住まい東側にある4つの和室と縁側には手を入れないことを望み

ました。和室の竿縁天井や建具や欄間、仏壇には、職人の丁寧な手仕事の跡と経年で深みを増した表情があります。「今ではどこを探しても手に入らない物ばかり。和室には一切触らないでくれ！」と伝えたんです」と笑うご主人。工事範囲を絞ることはコストダウンにもつながります。そこで東西に長い住まいの西側半分をメインの居住空間として手を加え、東側の古い空間と調和させることをテーマに計画をスタートしました。





古い柱や梁を生かしながら光を取り入れ、明るい住まいに

関工務店は、関さんの父である先代が1993年に創業。本社を置く穂保エリアを中心に、新築やリフォームの設計施工を行っています。大学卒業後、一度は別の道を選んだ関さんが建築を志したのは30代を目前にした時のこと。「父が会社を継げと言ったことは一度もないんです。けれど父の仕事を手伝う中で、汗をかい

て形に残る仕事の素晴らしさに引き込まれて。仕事と並行して専門学校に通い、建築士の資格を取りました」さらなる転機となったのが、2019年の台風19号。穂保エリアは多くの建物が被災し、暮らしの再建を迫られました。安心する住まいに1日でも早く戻りたいとリフォームや新築の相談を受けて東奔西

走するうちに「この地域で自分の役割を果たさなければ」と気持ちが固まり、正式に会社を継承。40歳の時のことでした。Sさんから相談を受けたのは会社を継ぐ前、先代の背中を見ながら仕事をしていた時のこと。「リノベーションは新築とはまったく違う能力を求められます。壁や天井の内側がどうなっているか工事



E_手入れの行き届いた庭から住まいの北側を見る。外壁は左官材で一新し、下屋の瓦は既存のものを生かしている。 F_茅葺き屋根の一部に天窓を設計し、アクリルに和紙を貼って北向きの柔らかな光を取り入れた。 G_リビング・ダイニングも天井を剥がして梁を現しに。生かせる梁は残す一方、耐震のために追加した新しい梁も、空間に馴染むようダークな色の塗装を施した。床や壁には、自然な表情があり住まいと共に経年変化する天然素材を選んでいる。キッチンや収納家具も関工務店が空間に合わせて選定した。 H_和室の縁側。かつての大工の丁寧な仕事*細部にまで宿る。 I_「和室に寝転んで庭を眺めていると落ち着く」と話すご夫妻。丁寧に磨かれた家具や建具が暮らしぶりを物語る。



をしてみないと分からない部分が多く、工期や予算も含めてコントロールが難しい。特にSさんのお住まいは100年以上の歴史があり、規模も予算も大きいため試行錯誤をたくさん繰り返して、私自身も成長させてもらった思い出深い仕事です」と振り返ります。

工事は壁や床、天井をすべて剥いで柱や梁といった構造体のみのスケルトンにするところからスタート。耐震補強と断

熱補強を行った上で、ご夫妻が希望する明るいワンルームのリビング&ダイニングを中心に間取りを変更し、将来を見据えてバリアフリー設計としました。

「古いものと新しいものが調和する空間こそ、リノベーションの醍醐味」と考える関さんは、柱や梁を現場で一つずつ見極め、残せるものを生かして何度も設計を熟考。この住まいには良質な材料が多く使われていたことから、既存の柱に

新しい柱を抱き合わせて補強するほか、天井の内側に隠れていたダイナミックな梁や茅葺き天井を見せるデザインとして、新旧を融合させました。古い梁を磨き上げる仕事は、木の扱いに長けた先代が手がけたのだそう。天井を抜き間仕切り壁を最小限にして光を取り入れ、和の趣ある特注建具も背の高いものにするなど伸びやかな設計により、明るく開放的な住まいへと生まれ変わらせています。



茅葺き屋根を継承して外観を一新。
天然素材の温もりが、新旧を結ぶ

関さんが悩んだのが、茅葺き屋根をどう生かすか。50cm近い厚みのある茅葺き屋根は断熱性に優れ、この住まいを長年守ってきた存在です。しかし経年で表面のトタンが反っていたことから、耐久性の面でネックに。そこでトタンの上に新たに下地を組んでガルバリウム鋼板を張り、耐久性と美しさを両立させました。さらに「光は暮らしを彩る大切な要素」と考える関さんは、Sさんとの会話をヒントに茅葺き屋根に天窓を設計。和紙貼りの窓を設置して、北向きのダイニングに柔らかな光を届けています。

新旧が溶け合うリノベーションにおいて、素材選びも重要です。「新しい素材にも経年変化する天然素材を選ぶことで、時間の流れが生まれます。Sさんの住まいの歴史に寄り添うため石油由来の新建材は使わず、左官材や無垢材を中心に選びました」と関さん。床は柔らかなパイン材フローリングとし、壁は藁スサ入りの左官材仕上げに。キッチンや造作家具にも木の温もりを取り入れつつ、天板の先端にテーパー(傾斜)をかけてシャープな印象に仕上げました。

くつろげる小上がりの和室、広い浴室、通りからの視線が気にならない塀の新設など、日々の暮らしやすさに配慮された住まいに、ご夫婦も快適さを実感しています。「古い家の時は不便な所、寒い所があちこちにあったけれど、今は心から気に入っているね。自分でリノベーションを決めたから関さんとたくさん話し合って、具合のいい家になったと思うよ」とご主人。信頼を置くづくり手とのリノベーションから、新しい暮らしの歴史が積み重ねられていきます。

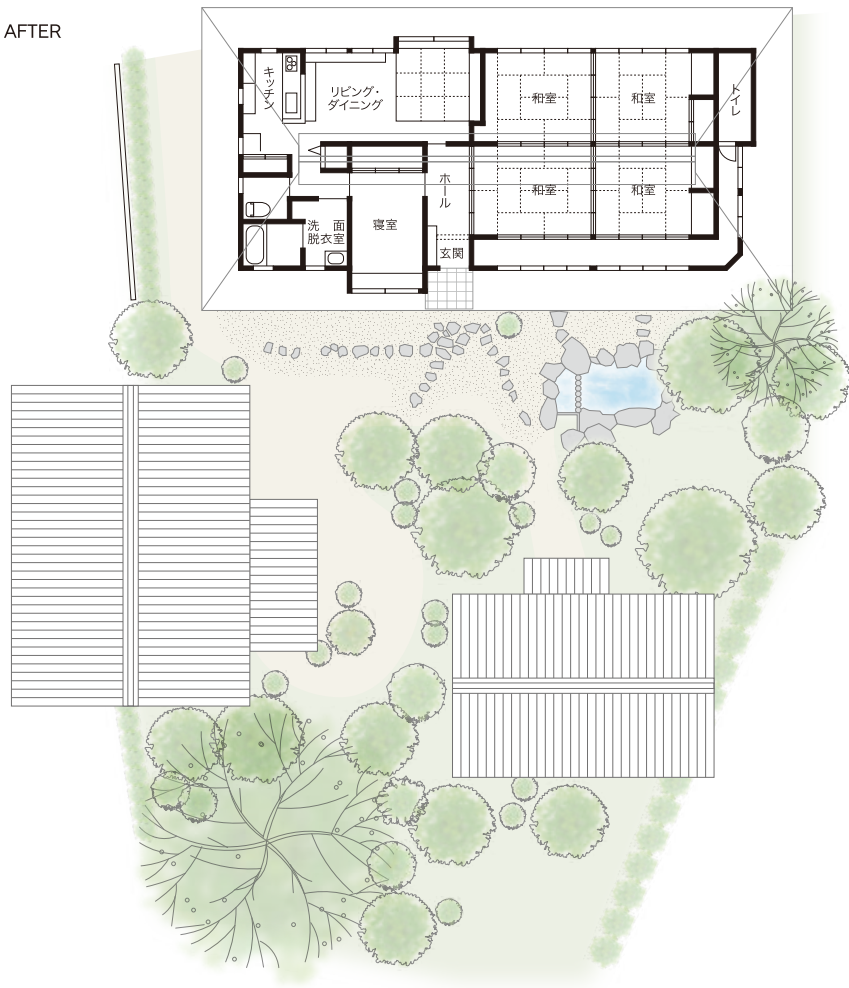
J
K
L

M

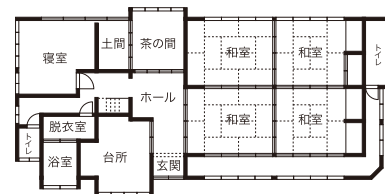
J_休日は庭木を剪定したり、庭を眺めてビールを飲んだりするひとときが至福だと話すご主人。池越しに見える正面の蔵も古くからのもの。 K_縁側の窓を開け放つと風と光が抜け、軒が日差しを遮る昔ながらの知恵が生きた設計。かつては自宅で冠婚葬祭の行事を行うことが当たり前で、広い和室が暮らしの舞台になっていた。 L_一周するだけでも楽しめる庭。四季折々の植物が暮らしを彩る。 M_住まいの北側遠景。奥に見えるのは奇妙山。歴史ある住まいが、昔から若穂の町並みの一部になっている。



AFTER



BEFORE



DATA 家族構成 ご夫婦
築年数 100年以上
既存状況 中古住宅／お住まいの家
延床面積 153.90㎡(46.46坪)